

## 大聖寺藩士高橋家旧蔵の金沢城絵図について

庄 田 孝 輔

今回紹介する金沢城絵図は、金沢市立玉川図書館が所蔵する大聖寺藩士高橋家旧蔵の文書群の一つである。高橋家は、由緒帳によると、大聖寺藩3代藩主前田利直のときに、大聖寺藩に召し抱えられ、歴代80石で馬廻組に属していた。この絵図は、67×78.5cmを測り、外堀内の郭と金谷出丸を描く。石垣を灰色、土居を茶色、堀を水色で着色し、墨書にて注記を行い、「金沢御城図絵」と題がついている。（以下本書では「金沢御城図絵」とする。）【図1】

本絵図を理解するにあたって参考となる研究に、木越隆三氏が『金沢城研究』2、3号<sup>[註]</sup>にまとめたものがある。木越氏は金沢城全体を書いた絵図について、（1）幕用図、（2）藩用図、（3）軍学関係図（縄張図）、（4）景観案内図（鳥瞰図、細見図）の4つに区分している。木越氏の分類によれば、「金沢御城図絵」は、藩用図のうち建物を書かない地割図に該当し、必要に応じて写されたものとなる。藩用図が軍学関係図（縄張図）に転換する途中段階のものと推定される。このタイプの絵図はすでにいくつか確認されており、金谷出丸に馬場、馬屋を描き、新丸に「古作事」「津田玄蕃上ヶ屋敷」と書くのが特徴的である。同様のものが「加州金沢城之図」（66×80cm 石川県立図書館蔵）【図2】、「宝暦13年金沢城図」（74.6×80.6cm 富山県立図書館蔵）【図3】と2点確認でき、これら2点と比較しながら、「金沢御城図絵」について紹介することとしたい。

以上3点の絵図は、まず絵図の大きさがほぼ同じであり、石垣、土居、堀の描き方、描写範囲はおおむね同一である。ただ「金沢御城図絵」では、二ノ丸内堀の底が省略されていること、二ノ丸と新丸の間の堀が空堀となっていること、松原屋敷前の外堀が描かれていないこと、百間堀の堀幅が広いなど細かい描写に差違が認められる。

この3点の絵図の文字情報を比較すると、「本丸」「東丸」「二之丸」「芳春院丸」「河北門」「鶴丸」「津田玄蕃上ヶ屋敷」「御寄合所」「古作事」「大手」「御宮屋敷」「玉泉院丸」「金屋門」については、一部で異字体が含まれるが、共通して記載されている。しかし「金沢御城図絵」では、「七十間長屋」と書くべきところを「七十間長」となっており、「屋」の字が省略されている。同様に「御数寄屋々敷」を「空キヤ屋敷」と書いている。また、金谷出丸の「馬場」を「厩」と書いており、その西側にある「厩」をほかの2枚の絵図では2棟描いているが、1棟で描いている。ただ、この絵図では西丁口門を「北之丸御門」と記載している。「西丁門」「会所門」と書く事例は散見されるが、「北之丸門」と表記した類例はなく、単なる誤記なのか、そのように呼ばれていたことがあるのか、今後の検討が必要である。

この絵図の作成時期について、直接知る手がかりはないが、「宝暦13年金沢城図」は、宝暦13（1763）年に越中砺波郡の十村が作成した絵図であり、同様に江戸後期の作図と推定される。

最後に、「金沢御城図絵」は、江戸後期に地割図を元に作成された城内の縄張を示した絵図を書き写したものであり、同じ原図を元に書き写されたものと推測されるが、ほかの2点の絵図と比べると全体的に粗雑なものとなっている。今回紹介した3点以外にも藩用図から軍学関係図（縄張図）に転換する課程にある絵図はいくつもあり、その成立過程や分類は今後の調査・研究の課題である。

〔註〕

金沢城調査研究室「金沢城全域絵図の分類と編年-金沢城絵図調査報告 -」『金沢城研究』2号 2004

木越隆三「金沢城の地割図と二の丸御殿絵図-金沢城絵図調査報告 -」『金沢城研究』3号 2005

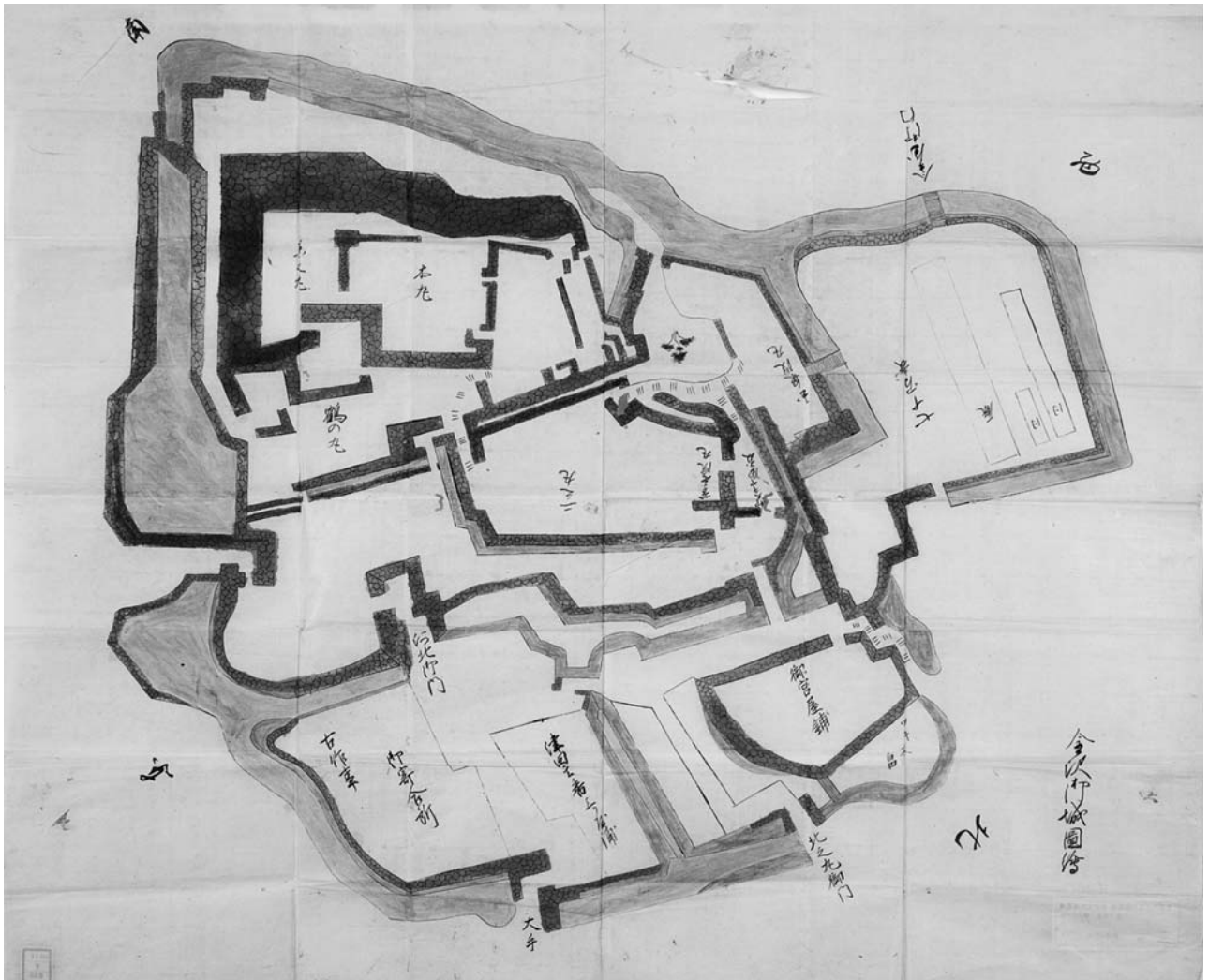


図1 「金沢御城図」 (大聖寺藩士高橋家旧蔵)  
(67×78.5cm 金沢市立玉川図書館蔵)

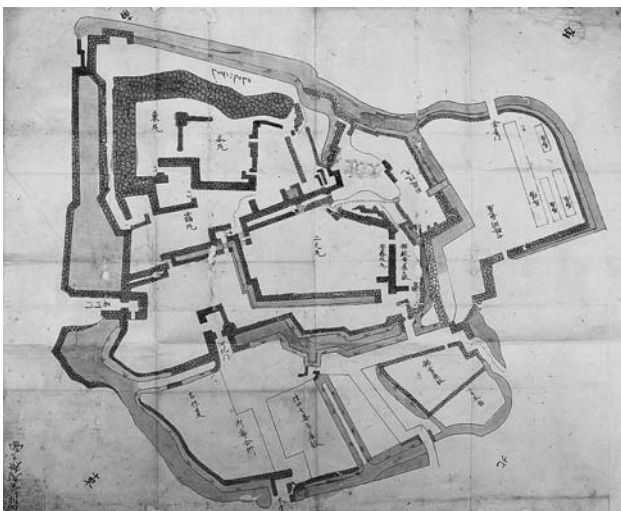


図2 「加州金沢城之図」  
(66×80cm 石川県立図書館蔵)

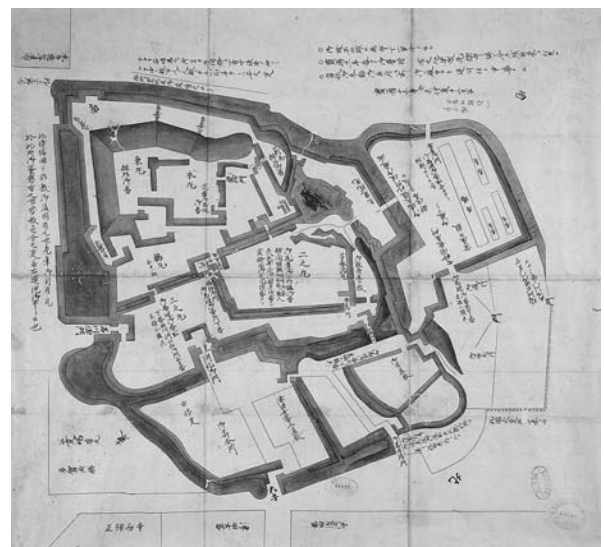


図3 「宝暦13年金沢城図」  
(74.6×80.6cm 富山県立図書館蔵)